

TIE 歴史

TIE

ネクタイはいつ出来たの？

ネクタイほど得体の知れない物はありません。ネクタイをしたからといって、涼しくなるわけでも暖くなるわけでもありません。また身体をガードしてくれることでもありません。人は何故ネクタイをするのか、いつからネクタイをするようになったのか？お答えしましょう。是非なにかの折にウンチクを語って下さい。ネクタイの起源は、1600年代のフランス「ルイ14世」の時代へと遡ります。17世紀後半、襟元の装飾品としてネクタイの原形ともいえる「クラバット」が、当時のフランス国王ルイ14世によって大流行。きっかけは、王に仕えるべく駆けつけたオーストリアのクロアチア兵(クラヴァット)たちが揃って首に巻いていた布でした。闘志をアピールし、しかもスマートなこの衿飾りに注目した王は、さっそく宮廷ファッションに取り入れ、いつしか一般市民へと普及していきました。ちなみに今でもフランス語ではネクタイの事をクラヴァットと言います。しかし、ネクタイが一般的になったのは、フランス革命後です。徴兵制が敷かれ、外征する兵士たちが、妻や恋人たちの振るスカーフを首に巻いたのが広まったとされています。巻き方もクラバットとは異なり、あごが隠れるほど高く巻き上げ、前で小さく結んでいました。どの説をとっても、すべて兵士のファッションから来ており、現在も「ビジネス戦士」の首を飾り続けているのです。

TIE

ネクタイを世界に広めたのは誰？

ネクタイはいつ出来たの？でも記述されてる通り、ルイ14世が広めたとされています。上にかかっている説が有力ですが他の説に、田舎の兵士が野良仕事の延長のように首に手拭いを巻いたスタイルに心をひかれたという話があります。

王は早速お抱えのテーラーに、最高級の生地を使って同じものを作るように命じ、自らの首に巻き付け得意げに披露しました。首元は暖かい、肌触りがよい、お洒落を演出する小道具が一つ増えたと、大変気に入られたといひます。時の権力者が身に着けたことで、取り巻きの王侯、貴族から軍人、学者などの一般人へと、たちまちのうちに拡がりを見せました。

ではルイ14世とはどのような人だったのでしょうか？

ルイ14世

フランス絶対王政最盛期の国王。在位1643-1715年。太陽王とも呼ばれる。ルイ13世とスペイン国王フェリペ3世の娘アンヌ・ドートリシュの子。4歳で王位に就いたため母后が摂政となり、マザラン枢機縁が宰相として実権を握った。リシュリューの後を継いで王権の強化をはかったマザラン時代には、これに反発してフロンドの乱(1648-53)が起こり、幼い国王も何度かパリを追われた。1660年スペイン国王フェリペ4世の長女マリア・テレサと結婚。マザランが没した翌61年から親政を開始した。

「朕は国家なり」という彼の言葉が示すように、ルイ14世は国務に関するすべての決定を自ら行おうと努め、同時に手足となる官僚機構の整備に力を注いだ。中央では宰相制を廃止、国王自ら臨席する最高国務会議の権限を強化し、地方では、国王の直轄官僚である地方長官の制度を確立した。この結果、貴族の政治権力は大幅に削減された。



TIE

ネクタイは本来なんのために作られたもの？当初はどんな形だったの？

ネクタイとは本来ファッションではなく、兵士たちの階級、同軍を示す印だったのです。

この衿飾りに注目した王は、さっそく宮廷ファッションに取り入れ、いつしか一般市民へと普及していきました。しかし、当時のネクタイは「一本の紐」を結ぶというより、「一枚の布」を首に巻き、余った部分が垂れ下がるといったようなものでした。ですから、どちらかと言うと、ネクタイと言うより、現在の「スカーフ」に近いスタイルだったと推測されます。

TIE

ネクタイを日本に伝えたのは誰？



日本人で初めてネクタイを締めた人は土佐出身のジョン・万次郎こと、中浜万次郎(1827-1898)だといわれています。万次郎は14歳の時、鯉漁船に乗って漁労に従事していたときに、遭難してアメリカの捕鯨船に助けられました。そのままアメリカに渡り英語、航海術、測量術等の勉強をしました。遠洋航海船の乗組員として働いたあと、カリフォルニアの金山で旅費を稼ぎ、ここで再会した仲間とともに沖縄に帰りました。

嘉永4年(1851年)の正月、一行は琉球の小渡浜に上陸、7月には鹿児島、9月には長崎に着き奉行所の取り調べを受けました。

万次郎の所持品として、ピストル、羅針盤の他に天保13年(1843年)にフェアヘブンで買い求めた「白鹿襟飾」が3箇あったと記録されています。

襟飾はネクタイのことです。この動かぬ証拠により、中浜万次郎が日本人で一番早くネクタイを締めた男になりました。

余談になりますが万次郎は、島津斉彬や山内容堂らに海外事情等を伝え、ペリー来航の際には、幕府から呼び寄せられてアメリカの実状を説明しました。

また、航海術の指導、翻訳書の出版、咸臨丸に通訳として乗り込むなどと活躍しました。

維新後は、開成学校の教師になり、英語教育尽力しましたが、晩年は高く評価されず寂しく隠遁生活を送り、72歳で亡くなっています。

TIE**明治30年頃の正装**

明治時代の
正装

この記事は明治33年ごろ洋服を着る者が次第に増える形勢にありましたが、未だこれをどうして用いるか判らず奇妙な格好で得意然と街を歩く人も見られる有様に、庶民に洋服の知識を広めるために当時、新聞に載せた記事をまとめた物です。

儀礼的な場合
の服装

昼の婚礼、午後の訪問、接客、観劇

夜の婚礼、夜会、儀式、宴会、観劇

略式の宴会、倶楽部、婦人を同伴しない観劇

平常時の
服装

就業中および午前の着用

運動、遊戯

午後6時までの茶話、観劇、見物

TIE**昼の婚礼、午後の訪問、接客、観劇**

上 衣	=	フロック
チョッキ	=	両前、片前上衣と同質、珍柄
ズボン	=	縞、甲儀には上衣と同質
帽 子	=	高き絹帽(シルクハットのこと)
シ ャ ッ	=	共カフスの白
カ ラー	=	端折(前折の三と)または立ダブルカラー
ネクタイ	=	黒襦珍または薄色又の字或いは結び下げ
手 袋	=	軍色または灰色スイス革
革 靴	=	ゴム付ボタン付
宝 石	=	金の夫婦カフス釦、金のピン

TIE**夜の婚礼、夜会、儀式、宴会、観劇**

上 衣	=	燕尾服
チョッキ	=	白黒両前または片前
ズボン	=	上衣と同質
帽 子	=	畳礼帽(帽子のシルクハットで中にスプリングがあり折タミができた)または高き絹帽
シ ャ ッ	=	共カフスの白
カ ラー	=	端折または立襟
ネクタイ	=	端広の白蝶形
手 袋	=	真珠色または白
靴	=	ゴム引草釦付またはゴム引革半靴
宝 石	=	真珠の胸釦位が上品または白

TIE**略式の宴会、倶楽部、婦人を同伴しない観劇**

上 衣	=	テレクサックコート
チョッキ	=	片前または両前上衣と同地質
ズボン	=	共カフスの自帽子
シ ャ ッ	=	共カフスの自帽子
ネクタイ	=	端広の黒絹煤形
手 袋	=	灰色スイス革
靴	=	ゴム引草ボタン付
宝 石	=	金の胸釦に金の夫婦釦

TIE**就業中および午前の着用**

上 衣	=	背広またはモーニング
チョッキ	=	片前上衣と揃、両細別地自由
ズボン	=	上衣と揃または珍柄もの
シ ャ ツ	=	胸の柔き共カフス色物
カラー	=	白の立襟または総折ダブル
ネクタイ	=	又の字、或いは結び下げ
手 袋	=	草色または灰色
靴	=	背広には赤靴、モーニングには黒
宝 石	=	金胸釦、金夫婦カフス釦、金時計鎖

TIE**運動、遊戯**

上 衣	=	片または両前の背広
チョッキ	=	派手な縞柄の両前または片前の珍柄
ズボン	=	派手な半ズボン
帽子	=	中折または鳥打帽
シ ャ ツ	=	派手なフランネルまたはメリンス
カラー	=	共布のシャツまたは背の広い総折
ネクタイ	=	シャツと同質の共布、その他自由
手 袋	=	濃紅色の革または白シューム革
靴	=	赤革または黒
宝 石	=	鋭留カフス、時計鎖

TIE**午後6時までの茶話、観劇、見物**

上 衣	=	フロックまたはモーニング
チョッキ	=	両前または片前上衣と同質
ズボン	=	縞 帽 子 = 高き絹帽
シ ャ ツ	=	白
カラー	=	高き立襟
ネクタイ	=	又の字、結び下げ
手 袋	=	草色または薄灰色スイス革
靴	=	ゴム引、革ボタン付
宝 石	=	金の胸釦、金の夫婦釦 (但し弔意を表す場合は、上衣、チョッキ、ズボン、釦、手袋等すべて黒色を用い、なお親戚親友の弔いの場合には左腕に喪章をつけるのがよろしい。)